

よどじん

河川敷に突如現れた巨大な魚影。
色鮮やかで芸術的なその姿に、
じっと目を凝らすと…
空き缶、ペットボトルに、バケツや棒きれ。
えっ、なにコレ!?
今月のよどじんは、河川敷のごみをあやつる
新進気鋭のパフォーマー

「淀川テクニック」

まつ なが かず や
松永和也さん



撮影:淀川区役所

2人が生み出すアート

子どもの頃、外に遊びに行くたびに汚れたスーパーボールや、ちぎれたフィギュアの一部を拾ってきては、せっせと秘密基地へ運んだ。「外は宝の山。みんなが『ごみ』というものが僕にはキラキラ輝いて見えた」と松永さん。

アートの世界に興味を抱き、淀川区内の服飾専門学校に進学。卒業後は、家具職人として生計を立てるかたわら、廃材などを使った小さな作品作りを続けていた。転機が訪れたのは今から約10年前。専門学校で1年先輩だった柴田英昭さんと始めた作品作りがきっかけで、ごみをあやつるアート活動がスタートした。

河川敷フェスティバルに出展

初めての表舞台は、今も続く淀川区の一大イベント「よどがわ河川敷フェス

ティバル」。柴田さんから「一緒にやらへん?」と誘いを受け、その記念すべき第1回フェスで淀川河川敷のごみ・漂着物で作った作品を出展。これが本当に面白かった。間もなく家具職人の職を辞し、2人で「淀川テクニック」としての本格的なアーティスト活動をスタートさせる。

素材は河川敷に

買うもの無し、道具も無し。ただただ河川敷にあるものをかき集めて、つなぎ合わせて作品を作る。でも何でも良いわけではない。描いたイメージに合うごみや漂着物を拾ってきては、パズルの要領ではめ込んでいく。

「面白いのは、作品を作る場所・地域・国によって、ごみの種類が全然違うってことです。ある場所ではプラスチックが主流だったり、一方では金属が主流



▲イメージに合わせパズルのようにはめ込んでいく

撮影:Yuragi Wakiya

